

教育熱心の過剰と学校不信

第 6 章

荒牧 草平（群馬大学）

階層的に恵まれた家庭の子どもほど高学歴を得る傾向にあるのはなぜだろうか。子どもの教育に対する親の熱心さは、これを解明する1つの鍵と考えられる。ただし、「階層→教育熱心→学校外教育利用や中学受験→教育達成」といった、一次元的で一方向的な因果連鎖の枠組みでは、現実の複雑な関連性を捉えられない可能性がある。そこで、探索的な分析手法である多重対応分析（MCA）を用いて、教育熱心の構造や諸要因との関連を解明するよう試みた。分析の結果、1) 親の教育熱心さは「一般的」なものとして「受験教育に特化」したものの二次元によってほぼ捉えられること、2) 一般的な教育熱心は親の階層的背景や子どもの学力と強く関連すること、3) 中学受験などに向かう過剰とも言える教育熱心さは、階層や子どもの学力によって規定されるのではなく、平等主義的な学校教育や教師に対する不信や不満と強く関連すること、等が明らかとなった。

1 研究の背景と問題関心

1.1 背景

近年の日本社会は格差社会であると言われる。いわゆる「勝ち組」と「負け組」への二極分化が進行している、という見方が示されることも多い。高い学歴を得たからといって何も保証が得られるわけではないが、子どもの将来を案じる親たちが教育に熱を入れるのも仕方のないことかもしれない。子どもの教育に成功する方法を謳った雑誌が相次いで発刊されているのは、こうした世相を反映している。もちろん、これらの情報が逆に人々の不安感を煽っている面も否めない。幼児向けの知能開発や英会話等の教材や教室はますます盛んになり、乳児への正しい教育方法を説く書物さえ多数出版されている。

しかし、もう少し距離をおいて眺めれば、すべての家庭がこうした風潮に同調した行動をとっているわけではない。むしろ、そのように語られ得るのは、一部の教育熱心な家庭に限られるとも言えるかもしれない。もちろん、どちらの道を選択するにせよ、各家庭が自分たちの考え方にしたがって行動しているのであれば、外部の者がとやかく言う問題ではないとも言える。しかし、早くから塾に通わせ、有名な小中学校等へ入学させるには、かなりの経済的負担が伴う場合が多い。また、それらを成功裏に進めるには、親の知識や経験、教育態度等も関係しているだろう。結果的には、親が高学歴であったり社会的地位の高い職業についていたりするほど、あるいは経済的に豊かな家庭ほど、子どもの大学進学率が高く、有名大学に合格する者も多いという状況が観察されることになる。この

ように、家庭背景と子どもの教育達成に関連があるという事実は、少なくとも教育機会の均等という観点から問題があると見なしうる。

1.2 先行研究

このような問題意識から、出身家庭の階層的な背景と教育達成の関連を、社会調査などの実証的なデータに基づいて解明する研究が数多く積み重ねられてきた。その結果、高校や大学へ進学する者の割合が大幅に増大した現代においても、出身階層による教育達成の格差は決して縮小していないことが明らかにされている（荒牧 2000など）。

他方、なぜ両者が関連するのかを解明する研究も様々な角度から行われているが、これらのうちでも、家庭の文化的背景の影響、とりわけブルデューの文化資本論に依拠した実証研究は数多くの国々において実施されている。ちなみにこれは、上層階級ほど学校文化に親和的な正統的文化資本を持っており、それらを元手に高成績や高学歴の獲得を通じて、高い階級の地位を獲得するという理解である。しかしながら、文化資本が世代間の再生産に強い影響をおよぼすという分析結果を報告する実証研究はあまり多くない。また、PISAデータを用いた最近の国際比較研究も、文化資本の影響は控えめなものだと結論づけている（Barone 2006）。これに対し、家庭の文化的影響を親の働きかけや教育的態度等と広くとらえ、その影響に着目する研究も展開されている。わが国においても、近年では、親の日常的働きかけ（卯月 2004）や子育て方針（本田 2008）等に着目する試みがある。日本社会は、ブルデューが研究対象としたフランス等のヨーロッパ諸国ほど階級文化が明確でなく、それらと学校文化との関連も弱いと指摘されている（竹内 1995）から、親の教育態度等に着目するアプローチは、より有効であると期待できる。

もちろん、文化的再生産論とは少し距離をお

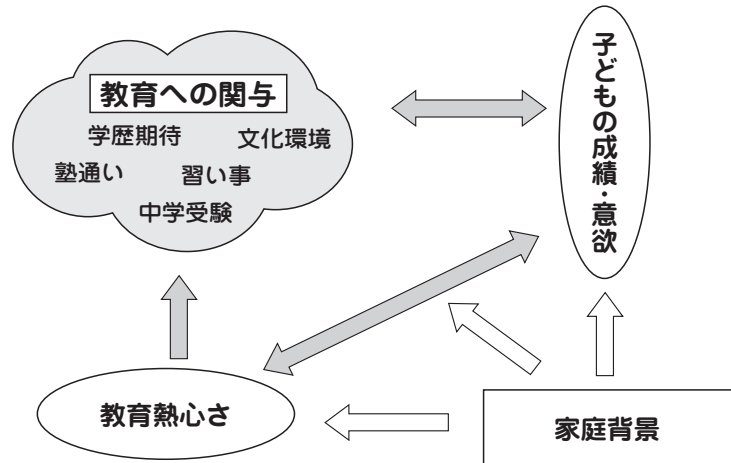
いた文脈でも、この問題に関連した研究はなされている。その1つが、塾通いや習い事等といった学校外教育の利用と家庭背景との関連に着目して、教育達成の階層間格差を検討したものである（盛山・野口1984；尾嶋 1997；近藤 1998；神林 2001など）。こうした研究の背景には、学歴や社会的地位が高く裕福な親ほど子どもの教育に熱心であり、高学歴獲得のため塾に通わせて進学実績の高い中学や高校に入れ、結果的に教育達成の階層差をもたらすという認識がある。確かに、わが国における教育選抜の実情を思い浮かべれば、塾通いなどの効果に関心が向けられるのも道理と言える。なお、各研究の結論には相違する部分もあるが、家庭の階層的背景と学校外教育の利用に関連を認める点では、いずれの研究も一致している。

1.3 関心

以上の通り、階層再生産の文脈では、子どもの教育に対する親の関与の仕方が、家庭の階層的背景によってどのように異なるかを解明することが、1つの重要な問題とされてきた。ただし、「階層→教育熱心→学校外教育利用や中学受験→教育達成」といった、一次元的で一方向的な因果連鎖を想定するのが妥当であるか否かに関しては検討の余地がある。子どもの教育に対する親の関わりは、それほど単純ではないと思われるからである。

まず、子どもの教育に対する関与と一口に言っても、その内容には様々なものが含まれる。これまでに取り上げられてきた事柄だけでも、塾通いや習い事等といった学校外教育の利用状況、芸術の嗜みや読書を促す一方でテレビやゲームから遠ざけるといった文化的環境の整備状況、あるいは子どもを将来どこまで進学させたいと考えているかや、中学受験をさせるつもりがあるかなど多岐にわたっている。もちろん、これらの行動や考え方には一定の関連性があると考えられるが、それが一次元的な「教

図6-1 教育熱心の構造および諸要因の関連イメージ



育熱心さの程度」として表現できるようなものか否かは、必ずしも実証的に明らかにされてきたわけではない。したがって、まずはこれを探索的に把握する作業が必要とされる。

先述の因果図式が気になるもう1つの理由は、子どもの教育に対する関わり方は、親の意向のみによって決定されるわけではなく、少なからず子どもの状況、とりわけ学業成績や学習意欲に影響を受けると考えられるからである。言い換えるなら、親の意向と子どもの状況は相互に依存し合っているはずである。たとえば、将来どの段階まで進学してほしいと考えるか(学歴期待)や中学受験させるか否かなどは、子どもの学力に依存して強められたり弱められたりするはずである。他方、入試のある学習塾等を例外とすれば、どんな習い事をどれだけやらせるかは、子どもの学力を考慮せずとも、親の意向によって決められうる。このように、教育に対する親の熱心さと子どもの状況との関連は、因果が複雑に絡み合っているのではないかと考えられる。ここで、家庭背景は親の教育熱心さや子どもの状況、および前者の后者に対する依存度に関わっていると予想されるが、それを検討するためにも、まずは上記の関連構造を同定しておく必要があるだろう。

図6-1は、上記の議論をふまえた諸要因との関連イメージを表したものである。ここで「教育への関与」の部分雲のイメージで表現したのは、「教育熱心さ」の反映として実際に示される親の様々な行動や考え方が互いにどのように関連しているかについて、現時点では何もわからないことに対応している。まずは、この雲の中に一定の秩序だった関連構造を見つけ出し、そこから教育熱心の構造をつかまえる作業を行うこととしよう。

2 教育熱心の構造把握： MCAによって雲をつかむ

2.1 多重対応分析 (MCA) とは

家庭背景と教育達成の関連を扱った従来の実証研究では、最終学歴や大学進学等に対する出身階層の効果を、重回帰分析やロジスティック回帰分析などの分析手法を用いて検討することが多かった。確かに、従属変数が特定され、それに対する独立変数の影響について明確な因果関係を仮定できる場合には、これらの分析方法が力を発揮する。

しかし、本章の関心は、必ずしも因果関係が知られていないデータの構造を探索的に明らかにすることにある。こうした目的に合った分析

方法はいくつかあるが、ここでは多重対応分析 (Multiple Correspondence Analysis : MCA) を採用してみたい。MCAでは、初めにデータの全体的な分散のうち最も多くの部分をとらえる軸 (主軸) を抽出し、次に、主軸によって捉えられなかった分散を最も説明する軸を、主軸と直交する空間の中から抽出し、さらに残された分散について以上と同様の作業を繰り返し行っていく。図6-1に示したイメージを使って比喩的に表現すれば、まずは雲 (データの散らばり) の一番長い部分を捉える線 (主軸) を引き、次に、それと直交する線の中で最も長い部分を捉えるものを探し出す、という作業を繰り返すことになる。

なお、MCAでは、抽出した軸で構成された空間に各変数の値をプロットすることができる。この座標空間では、各変数の個々の値 (変数値) 同士における関連の強さが、空間上の距離として示されるので、互いに近くにプロットされた変数値同士は関連が強く、逆に遠ければ遠いほど関連が弱いことになる。一般的な相関係数では一度に2変数間の関連しか把握できないが、MCAでは複数の変数値同士の関連を同時に図示

できるため、それぞれの変数値同士が持つ多様な関係性を直感的に把握することができる。

2.2 教育熱心の構造

図6-2は2008年保護者データのうち、親の教育熱心さの表れと見なしうる変数群に対してMCAを適用した結果である⁽¹⁾。なお、習い事や中学受験の意志などに関心があるため、分析対象は小学生の子どもを持つ親3,428名に限定している。図6-2では、第1軸を横軸に、第2軸を縦軸に取った二次元座標平面に、分析に用いた各変数値の座標をプロットしている。なお、データのすべての散らばり (Total Inertia) のうち、68%が第1軸によって、23%が第2軸によって捉えられている。残された分散は9%にとどまり、これら2つの軸によって上記の変数値同士の関連性が上手く捉えられていることがわかる⁽²⁾。また、第2軸によって捉えられる分散が全体の4分の1近くに達していることから、この軸が捉えた関連性も、十分に検討する意味があると言えるだろう。裏を返せば、従来の議論のように、教育熱心な度合いを一次元によって捉えようとするのは不十分だと判断できる。

表6-1 図6-2のMCAにおける習い事と所持品の座標

a. 習い事			b. 所持品		
	第1軸	第2軸		第1軸	第2軸
絵画	.30	.01	子ども専用パソコン	.07	.06
受験塾	.28	.35	携帯電話	.06	.13
バレエ	.20	-.02	本が多い	.06	.01
楽器	.18	-.03	携帯ゲーム機	.00	.01
英語	.18	-.05	子ども専用テレビ	-.09	.06
習字	.16	-.08			
家庭教師	.15	.24			
通信教育	.15	-.10			
水泳	.14	-.08			
公共	.13	-.06			
音楽	.13	-.05			
そろばん	.12	-.05			
補習塾	.08	.02			
体操	.07	-.01			
プリント教材教室	.07	-.02			
その他	.06	.03			
野球	.02	.00			

図6-2から第一に指摘できるのは、ほとんどの変数値が第1軸に沿って並んでいるということである。それはまた、習い事数の分布とほぼ対応している。また、子どもへの学歴期待や中学受験をさせるか否かについても、第1軸座標にのみ着目すれば、左から右にかけて、期待する学歴程度が高まり、中学受験意欲も高くなっていることがわかる。ここから第1軸は一般的に考えられるような親の教育熱心さを上手く捉えていると言えるだろう⁽³⁾。

しかしながら、図6-2において際立っているのは、第1象限の右上に「子どもへの学歴期待が大学院」「中学受験する」「家庭教師の利用」「受験塾通い」が集まっている点であろう。ここには、子どもに最上の学歴を求め、それを確実にするために中学受験を計画し、家庭教師を雇い、受験塾に通わせるといった行為の関連性が反映されている。ここから第2軸は、高学歴の達成や受験競争での成功を極度に志向した、狭義の教育熱心さを捉えていると判断できる。この傾向を仮に受験教育熱心と呼んでおこう。

ところで、文化資本論への関心からすれば、様々な習い事や子どもの所持品にいかなる関連が認められるかが注目される。また、上記の関連構造が階層的背景とどのように関わっているかは、文化論的な立場を採るか否かにかかわらず、社会階層の再生産という観点から最も関心を持たれる点である。このうち後者については節を改めて検討することとし、ここでは前者について確認しておこう。なお、図6-2では、それぞれの習い事や所持品の配置がわかりづらいので、それぞれの軸に対する各項目の座標を表6-1に示した。

まず習い事について見ると、第1軸において最高点を与えられたのが「絵画（絵画・造形）」であり、「バレエ（バレエ・リトミック）」「楽器（ピアノ・バイオリン）」なども比較的接近している。この点にのみ着目すれば、従来指摘されてきたような芸術文化資本との関連が想起され

るかもしれない。ただし、「音楽」のスコアは「習字」よりも低く、「楽器」や「バレエ」は「絵画」よりも「習字」や「そろばん」との距離が近い。したがって、これらから文化資本論に即した解釈をするのは困難という印象を受ける。

所持品についても確認すると、必ずしも「本が多い」のスコアが高く「子ども専用テレビ」「携帯電話」「ゲーム機」が低いといった関連が認められるわけではない。したがって、やはり文化資本論的な解釈は難しそうである。また、そもそも全体が原点近くに集まっており、ここで抽出された「教育熱心さ」とは、あまり明確な関連を持たないことがわかる⁽⁴⁾。なお、携帯電話は比較的是っきりとした位置づけにあるが、第2軸でプラス方向にあることから、深夜の受験塾通いと関連が示唆される。

3 教育熱心と背景要因の関連

前節では、学校外教育の利用や文化的環境の整備、学歴期待や中学受験の計画などの関連から、子どもの教育に対する熱心さの構造について把握するよう努めた。これは図6-1における雲の形を把握する作業と言える。本節では、抽出された2つの教育熱心さが、階層的背景や子どもの成績などといかなる関連にあるのか探ってみよう。なお、これらの要因は、図6-1にも示したように、複雑に影響し合っていると考えられるが、まずは階層や子どもの成績等がこれらの熱心さを規定するという従来型の因果図式に則って分析してみよう。

表6-2は、2つの教育熱心軸それぞれを従属変数とした重回帰分析の結果である。家庭背景要因としては、「経済的ゆとり」「親の学歴」「きょうだい数」を、子どもの側の要因として、「子どもの成績」「学習時間」「性別（男子ダミー）」を用いた⁽⁵⁾。なお中学受験などには地域差があると考えられるので「大都市部ダミー」も投入してある。

図6-2 教育熱心の構造

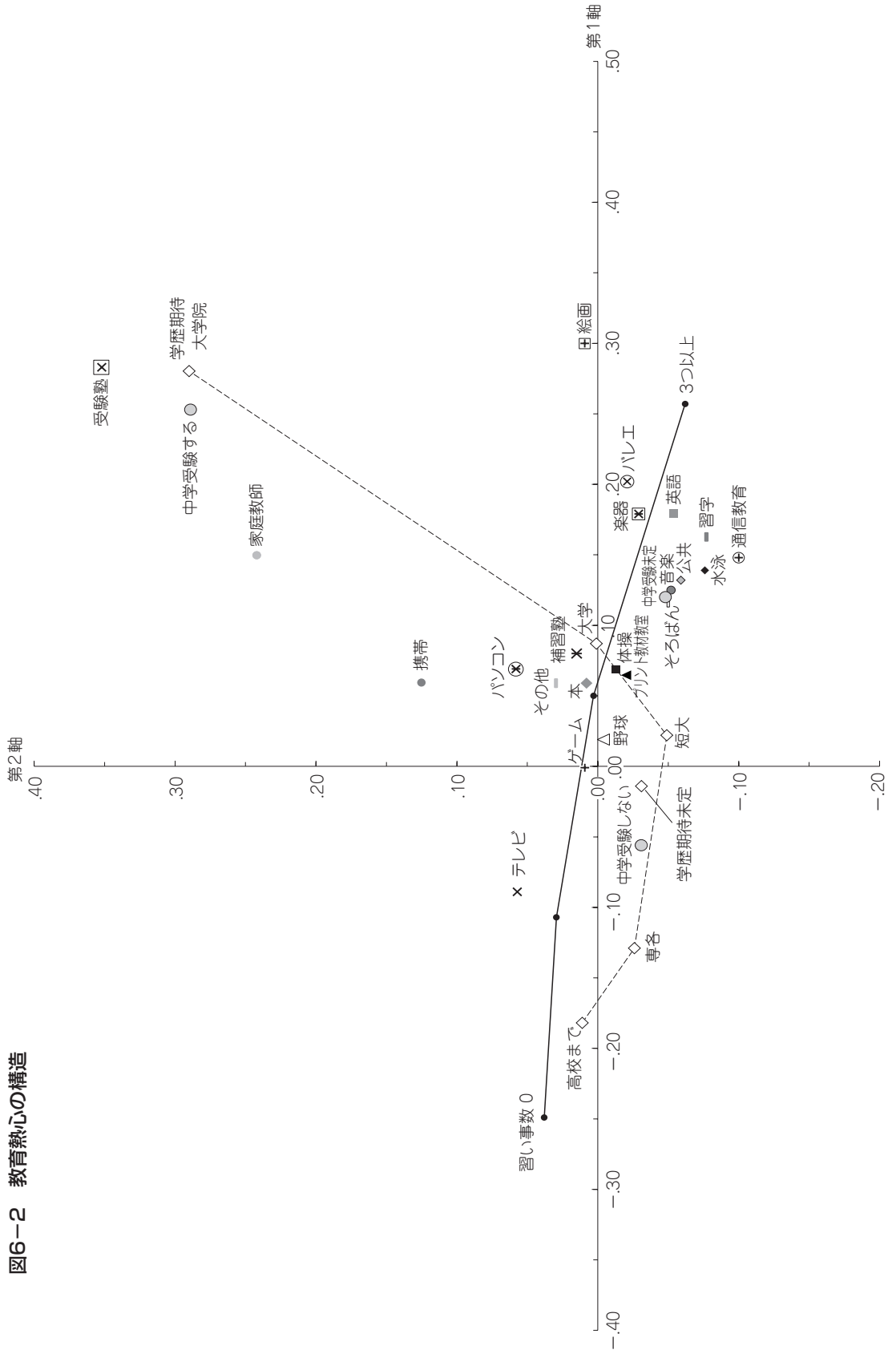


表6-2 教育熱心の重回帰分析

	第1軸 (一般的教育熱心)		第2軸 (受験教育熱心)	
	B	β	B	β
経済的ゆとり	.01**	.17	.00	.03
親の学歴	.02**	.31	.00	.03
きょうだい数	-.01**	-.13	.00	.01
子どもの成績	.01**	.22	.00	.00
学習時間	.00**	.04	.01**	.22
男子ダミー	-.01**	-.08	.00**	.06
大都市部ダミー	.01**	.10	.02**	.21
定数	-.09**		-.04	
R ²	.334		.116	

注) ** $p < .01$ * $p < .05$

まず第1軸（一般的教育熱心）を見ると、投入したすべての変数が1%水準で統計的に有意となっており、モデルの説明力を表す決定係数も0.334と比較的大きな値を示している。したがって、この意味での教育熱心さは従来から指摘されてきたような諸要因と強く関連していることがわかる。また、 β の値から相対的な関連の強さを見比べると、親の学歴を中心とした家庭背景要因が強く働く一方で、子ども自身の成績なども少なからず関与していることが見て取れる。

これに対し第2軸（受験教育熱心）を見ると、第1軸の場合とは異なり、有意となる変数も少なく、全体の説明力も1割程度にとどまっている。また、階層要因や子どもの成績など、一般的な教育熱心で強い効果を示した変数が、いずれも統計的に有意な効果を持たない。これに加えて興味深いのは、子ども自身の成績が有意でない一方、学習時間が比較的強い効果を示している点であろう。学習時間を子どもの意欲の強さや努力（荻谷 2000）を測る変数と解釈すれば、大学院進学や中学受験等を志向するか否かは、本人の学力でなく意欲や努力に大きく関わることになる。ただし、小学生の学習時間には親の意向が強く働くことと解釈すれば因果関係はむしろ逆であり、受験教育に熱心な親の子どもは、長時間の学習を強いられているということになる。

以上の関連を、MCAによって改めて捉えたの

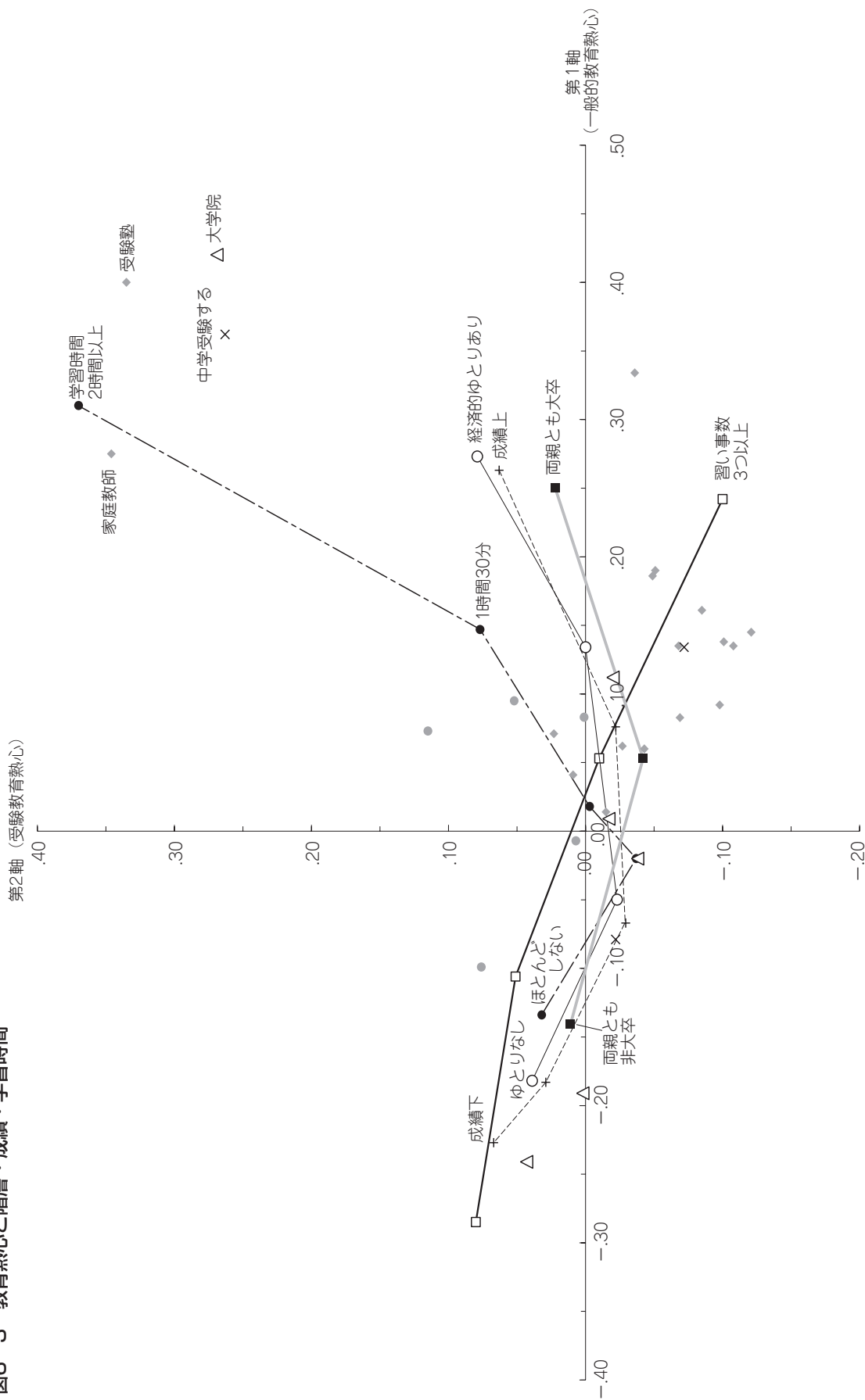
が図6-3である。これは図6-2で用いた諸変数に「経済的ゆとり」「親の学歴」「子どもの成績」「学習時間」の4変数を加えて、改めてMCAを適用した結果である(6)。まず確認できるのは、各変数値の全体的な配置が図6-2とほとんど変わらず安定していることである。その上で、新たに加えた4変数に着目すると、まずは「経済的ゆとり」「親の学歴」「子どもの成績」の3変数が、第1軸に即してほぼ同様の分布をしていることがわかる。表6-2の重回帰分析で、これら3変数が第1軸と強く関連していたことが直感的に理解できる。その一方で、「学習時間」の動きはよりダイナミックである。「ほとんどしない」から「1時間30分」までは、どちらかという第1軸に沿って移動しているが、「2時間以上」から突然立ち上がり「家庭教師」や「中学受験する」などと近い位置にまで達している。重回帰分析では「学習時間」が第2軸に対して強い相関を持つことが示されたが、それは学習時間が長いほど親が受験教育熱心である（あるいはその逆）という単純な線形関係を表すわけではなく、「2時間以上（3時間30分以上も含まれる）」という長時間の学習とのみ強く関連するのである。

一般的な教育熱心と受験教育熱心を区分しない従来の一次的な枠組みでは、階層的背景や子どもの成績と受験教育熱心が直線的に関連することが想定されていた。しかし、ここでの分析結果は、そうした単純な見方に修正を求めるものと言える。相対的に恵まれた家庭において子どもが高い学力を得たとしても、同じ次元の延長線上に受験教育熱心が位置しているわけではないのである。そこへ向かわせるには、上記で検討したのとは異なる要因が関与していることが示唆される。

4 過剰な教育熱心と学校への不信・不満

それでは、子どもに最高水準の学歴を求め、受験塾通いや家庭教師も含めた長時間の学習に

図6-3 教育熱心と階層・成績・学習時間



よって中学受験を目指させる等といった、過剰とも言えるほど子どもの教育に熱心となる背景には何が隠されているのだろうか。まずは、より一般的な親の教育意識との関連を探るため、学校への期待との関連を見てみよう。

表6-3は学力や意欲の形成に関する学校への期待の強さごとに、受験教育熱心スコアの平均値を求め、値の差異について一元配置分散分析によって検定を行った結果を示したものである。ここには1つの意外な結果が示されている。それは学校に「受験学力」を「まったく期待しない」層で、受験教育熱心のスコアが高いことである。素朴に考えれば、受験教育熱心スコアの高い者ほど、学校に対しても受験学力の形成を期待すると考えられる。しかし事実はまったく正反対なのである。また「基礎学力」や「学ぶ意欲」に関しても、「期待しない」と答えている層で、受験教育熱心スコアが高いことが確認できる。ここから、受験教育に熱心な傾向は、学校への不信感と関連している可能性が指摘できる。

この点について確かめるため、学校への満足度や教育改革に対する意識についても同様に調

表6-3 学校教育への期待と受験教育熱心

	とても期待する	まあ期待する	あまり期待しない	まったく期待しない	F値	p
受験学力	.08	-.09	.02	.38	9.5	.00
基礎学力	-.04	.05	.38	.24	5.4	.00
学ぶ意欲	-.07	.10	.41	.56	11.7	.00

べてみよう。学校に不信感を持っている者は現行の学校教育に満足しておらず、それらへの改革を求める傾向も強いと考えられるため、もし先の解釈が正しいなら、これらの項目でも同様の関連が認められると予想されるからである。

表6-4は、こうした予想と関連する諸変数について、上記と同様の分析を行った結果である。ここから、学習面での教師の指導や熱心さに強い不満や不信を持っている者ほど、そして現行の平等主義的な教育でなく学力の高い子どもの力を伸ばすような改革に賛成する者ほど、受験教育熱心の傾向を強く持っていることが明瞭に読み取れる。

以上より、過剰とも言えるほど受験教育に熱心となる背景には、学校教育や教師に対する不信と不満が明確に存在していると結論づけることができる。

表6-4 学校教育に対する様々な意識と受験教育熱心

a.学校への満足感	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	まったく満足していない	F値	p
教科の学習指導	-.07	-.03	.12	.52	5.63	.00
一人ひとりの学力や興味に応じた指導	-.02	-.07	.05	.23	5.51	.00
学ぶ意欲を高めること	-.08	-.03	.04	.21	2.60	.03
先生たちの教育熱心さ	.04	-.06	.07	.26	5.70	.00
b.教師の対応に感じること	とても感じる	やや感じる	あまり感じない	まったく感じない	F値	p
先生の教える力が低下している	.23	.03	-.07	-.24	6.78	.00
先生による指導力の差が大きい	.12	-.07	-.09	-.07	6.29	.00
学校の先生は信頼できる	-.03	-.06	.07	.37	4.88	.00
学校は一人ひとりに応じた教育を行っていない	.27	.03	-.11	.04	9.27	.00
c.教育制度の変更に対する賛否	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	F値	p
理解の早い子どもにはさらに高いレベルの学習をさせる	.38	-.06	-.12	.00	24.22	.00
学力の高い子は飛び級ができる制度を作る	.49	.05	-.10	-.02	18.85	.00
小学校高学年を教科担任制にする	.30	-.05	-.08	-.04	14.07	.00
d.教育に対する考え方	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらかといえばBに近い	Bに近い	F値	p
A：学校が競争すれば、学校の中に活気が生まれて教育は良くなる B：学校が競争すると、成果を上げるために無理をして教育は悪くなる	.46	.07	-.08	-.01	13.17	.00
A：教科書は基礎的な内容に重点を置いて作ったほうがいい B：教科書は高いレベルの内容も盛り込んで作ったほうがいい	-.04	-.05	.02	.67	16.89	.00
A：子どもの個性に応じて学習内容をもっと選択できるようにするのがよい B：義務教育では、すべての子どもに共通する内容を教えるのがよい	.32	.01	-.06	.01	9.03	.00

5 結果のまとめと考察

本章では、子どもの教育をめぐる様々な局面に表れる親の熱心さは、家庭背景と教育達成の結びつきを解明する鍵の有力候補と考え、その構造や背景について分析を進めてきた。同様の関心に基づく研究は、これまでも積み重ねられてきたが、しばしば暗黙のうちに、一次的で一方的な因果連鎖を想定しており、この問題が持つ複雑な関連性を捉えきれていなかった。そこで、探索的な分析手法である多重対応分析(MCA)を用いて、その複雑性の解明を試みた。

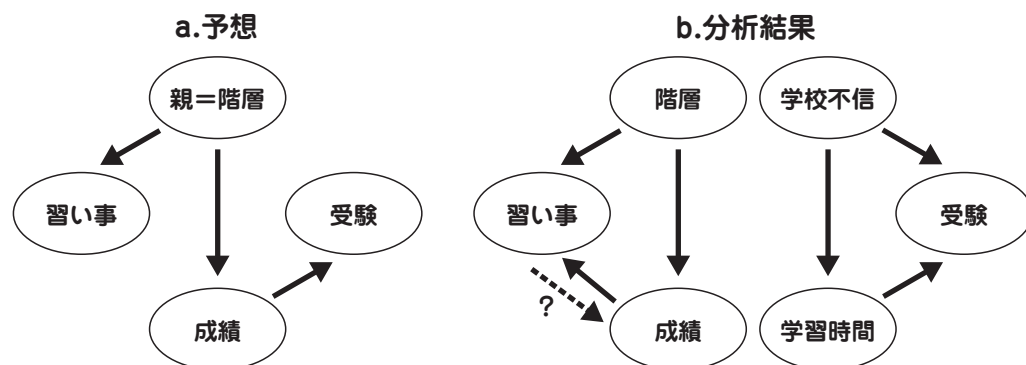
分析の結果、1) 親の教育熱心さは「一般的」なものとして「受験教育に特化」したものの二次元によって捉えられること、2) 一般的な教育熱心は親の階層的背景や子どもの学力と強く関連すること、3) 中学受験などに向かう過剰とも言える教育熱心さは、階層や子どもの学力によって規定されるのではなく、平等主義的な現在の学校教育や教師の指導に対する不信や不満と強く関連すること、等が明らかとなった。このうち、一般的な教育熱心に関する分析結果は、従来の研究枠組みにおいて理解できる。教育達成における階層間格差を説明する1つの要因として、教育熱心に着目する意義が改めて確認されたことになる。しかしながら、受験教育に特化された熱心さは、それと同じ一次的な因果連鎖の延

長上に位置しているわけではなかったのである。

ところで筆者は第1節において、教育熱心と階層との関連を検討する前に、子どもの成績や意欲と親の意向の相互依存性も考慮すべきだと主張した。図6-1に示した諸要因の関連性について一定の知見が得られた今、これらの複雑に絡み合った因果関係について図6-4のまとめも参照しつつ少し整理してみよう。

まず、教育熱心と子どもの状況との関連について、第1節では、学歴期待や中学受験が子どもの学力等に依存しがちである一方、習い事をどれだけやらせるかは、親の意向が働く余地が大きいだろうと推測した(図6-4a)。ところが、子どもの成績と強く関連していたのは、むしろ後者の習い事だったのである(図6-4b)。ただし、成績自体が階層と関連することが知られているから、習い事と成績に認められた関連は、両者がともに家庭背景の影響を受けることに起因する面があろう。その意味では当初の予測が完全に外れていたわけでもない。ただし、重回帰分析では、親の学歴等を統制しても子どもの成績が統計的に有意な効果を持つと確認されているから、成績が階層に還元されない独自の効果も持っていることは否定されない。ここで因果の方向を逆にして、「勉強」とは直接関連しない習い事なども、文化的生活経験の豊かさ等として成績に影響すると解釈すると、文化資本論的な解釈が妥当する余地も残される。

図6-4 諸要因の相関図(当初の予想と分析結果)



他方、学力に強く依存すると予想された高学歴期待や中学受験には、学力も階層的地位も関連しなかった。分析の結果、これに強く影響するのは長時間学習とわかったが、学力が効果を持たないこと、分析対象が小学生であることなどを考慮すれば、これは親の意向を反映したものと解釈できる。しかも、その意向には階層的地位が関連しているわけではなかった⁽⁷⁾。社会階層の影響に関心を持つ者は、「親の考え」と階層的背景を即座に結びつけて考えがちだが、ここでの結果は、そうした単純な発想を戒めるものと言える。

親を受験に向かわせる背景要因として本章で指摘されたのは、階層的地位ではなく、学校や教師への不信感や不満であった。ここで、学校

や教師が信頼できないから塾や家庭教師などに頼むという考え方は、その是非は別として、一種の合理性を持つものとして理解できる。また、飛び級や習熟度別学習の推進といった学校改革には肯定的なので、学校教育を根本的に否定しているというよりも、平等主義が強い現在の公立小学校に対する不満を表明していると理解することも可能である。しかし、不確定な将来の学歴達成を重視するあまり、長時間学習等によって現在の子どもの生活をいわば蔑ろにしている面があるとすれば、むしろ非合理的であると考えられなくもない。学校の現状への不信と不満を強く訴え、将来の成功に拘る一見合理的な行為の裏には、現在と将来の生活に対する漠然とした不満や不安感が隠されているのかもしれない。

<注>

- (1) 分析には、「習い事 (表6-1aの17項目)」、「所持品 (表6-1bの5項目)」、「習い事数 (0~3つ以上)」、「親の学歴期待 (「高校まで」「専門・各種学校」「短大」「大学」「大学院」「その他)」、「中学受験 (「する」「未定」「しない)」の、合計35項目を用いた。
- (2) Inertiaの値にはBenzecriの修正を施してある。
- (3) MCAは、連続変数を前提とした主成分分析をカテゴリー変数にまで拡張したものと考えられる。したがって、主成分分析の場合と同様にして軸の解釈が可能である。これを行うには軸への寄与を確認する必要があるが、煩雑さを避けるためここでは省略した。なお、これを確認して得られる解釈は本文に述べたものと変わらない。
- (4) ただし、注(3)で指摘した軸への寄与を確認すると、所持品のうち「本が多い(.85)」の値が、「楽器(.90)」「英語(.89)」「絵画(.86)」に次いで高いことは指摘しておく必要があるだろう。なお、その後には「水泳(.76)」「習字(.75)」「バレエ(.71)」「そろばん(.67)」と続く。
- (5) 変数は以下のように構成した。「経済的ゆとり」：「ゆとりがある」4~「ゆとりがない」1。「親の学歴」：「両親とも大卒」3、「どちらかが大卒」2、「ともに非大卒」1。「きょうだい数」：「1人」1~「5人」5(「5人以上」はほとんどいないので、ひとまとめにした)。「子どもの成績」：「上のほう」5~「下のほう」1。「学習時間」：「ほとんどしない」1、「およそ30分」2、「1時間」3、「1時間30分」4、「2時間以上」5(「2時間以上」は「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」「それ以上」をまとめたもの)。なお、親の学歴などは厳密にはカテゴリー変数として投入すべきであるが、結果の解釈が容易となるよう、ここでは連続変数としてある。大まかな傾向を確認する目的には、こうした設定も許容されよう。
- (6) ちなみに第1軸で全分散の72%が、第2軸では18%がそれぞれ説明される。図6-2の分析結果と比較して第1軸の説明力が上がっているのは、新たに投入した4変数のうち3つまでが、ほぼ第1軸に沿って分布していることと関連している。
- (7) 受験教育熱心の重回帰分析で、家庭背景要因のみを投入したモデルM1と、子どもの要因のみを投入したモデルM2を計算してみたところ、M1では階層要因のうち親の学歴のみが5%水準で有意となるものの効果は小さく($\beta = .05$)、一方でM2における学習時間の効果($\beta = .22$)は表2に示したモデルと変わりなかった。ここから、受験教育熱心に対する学習時間の効果は階層とは相対的に独立したものと解釈できる。

<参考文献>

- 荒牧草平、2000、「教育機会の格差は縮小したか——教育環境の変化と出身階層間格差」近藤博之編『日本の階層システム3——戦後日本の教育社会』東京大学出版会、15-35.
- Barone, C., 2006, "Cultural Capital, Ambition and the Explanation of Inequalities in Learning Outcomes: A Comparative Analysis," *Sociology*, 40 (6) : 1039-58.
- 本田由紀、2008、『「家庭教育」の隘路——子育てに脅迫される母親たち』頸草書房。
- 神林博史、2001、「学校外教育投資がもたらすもの——学校外教育投資と教育達成、学習意識との関連について」片瀬一男編『高等学校における学習意識の実証的研究』1998～2000年度科学研究費補助金研究成果報告書、57-77.
- 荻谷剛彦、2000、「学習時間の研究——努力の不平等とメリトクラシー」『教育社会学研究』66: 213-29.
- 近藤博之、1998、「学校外教育の普及とその進学効果」近藤博之編『教育と世代間移動（1995年SSM調査シリーズ10）』: 29-33.
- 尾嶋史章、1997、「誰が教育に支出するのか——学校外教育支出の分析」『大阪経大論集』48 (3) : 311-27.
- 盛山和夫・野口裕二、1984、「高校進学における学校外教育投資の効果」『教育社会学研究』39: 113-26.
- 竹内洋、1995、『日本のメリトクラシー——構造と心性』東京大学出版会。
- 卯月由佳、2004、「小中学生の努力と目標——社会的選抜以前の親の影響力」本田由紀編『女性の就業と親子関係——母親たちの階層戦略』頸草書房、114-32.